

観天望気

観天望気

自然現象や生物の行動のようすから天気を予想することを、観天望気といいます。また、その天気を予想するもとなる条件と結論を結びつけた、天気のことわざのような言い伝えのことも観天望気といいます。

自分の住んでいる地域で、観天望気について地域の人から聞いたり、インターネットや図書資料などを使って調べたりすると、天気の変化により興味がわくことでしょう。また、これまでの気象観測から得られた知識から、観天望気の理由づけを考えると、意欲的な活動が期待できます。

●「朝焼けは雨、夕焼けは晴れ」

春や秋、西の空に夕焼けが見られると、西のほうに雲がない天気であるので、翌日は晴れると考えられます。また、朝焼けは東のほうがよく晴れていることを示し、春や秋には、温帯低気圧と移動性高気圧が交互にやってくるので、天気が下り坂に向かっていると考えられます。

●「うろこ雲が出ると天気が一変する」

うろこ雲は、温暖前線の東側や低気圧の中心の北側に現れることが多いとされています。この雲は、低気圧が近づくと前ぶれとなり、早ければその夜、遅くとも翌朝には雨になることが多くなります。

●「飛行機雲は天気の変わる兆し」

飛行機雲が長く消えずに見られるときは、上空の空気が水蒸気を多く含むということで、天気は悪くなります。

●「白雲が西へ糸を引くと暴風になる」

夏以外に巻雲が東から西へ流れている場合、天気はまもなく崩れます。それは、この雲の上空には通常偏西風が吹いているにもかかわらず、反対の西へ移動していることから、強い低気圧が西にあると考えられるためです。

●「かなとこ雲が立つときは暴風がくる」

寒冷前線の接近にかかわらず、積乱雲ができるときには激しい上昇気流が起こっていて、突風、雷、ひょうなどが起きることがあります。

雨上がりの地面のようすの観察

雨上がりの地面のようすの観察

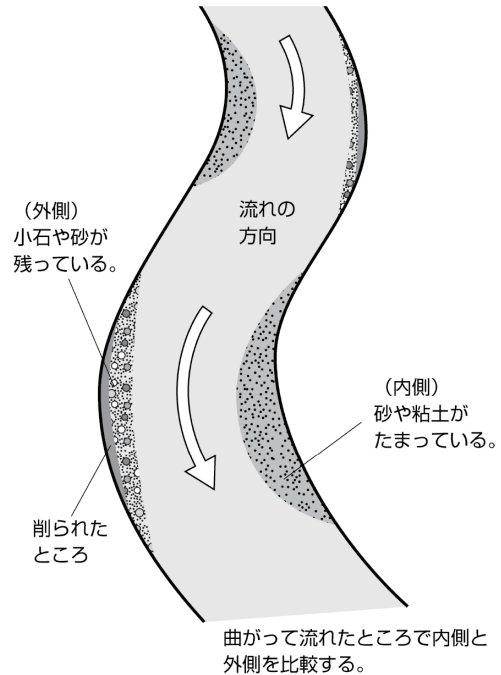
うまく条件が整えば、教科書の写真だけでなく、実際に地面を水が流れたようすを観察させましょう。

雨が上がり、まだ多くの児童に校庭などが踏まれているときに、学習に出るようにします。また、観察時に、自分たちで水が流れた跡を踏まないように、事前に指導します。

運動場などの場合は、大きな水たまりから流れ出て、排水溝へ向かう流れがあったり、山からの流れがあったりして、地面の傾きによって流路が決まってきます。その流路（または流水痕）をたどりながら、その途中を詳しく観察させていきます。

排水しやすいように工事されている学校では、少々雨が降っても、水が流れたり、水たまりができたりしないことがあります。事前に、水の流れるところ、水たまりができやすいところを探しておくといでしょう。また、校内での観察が無理な場合は、近くの公園などで観察させることも考えられます。

●児童の観察記録例



校庭で、高低差があり雨水の流れがあるところでは、意図的に溝をつくって流れやすくしておくのもよいでしょう。そのとき、溝を蛇行させておくと、砂がたまったり削られたところを観察することができます。

台風の時や大雨の時の観察は、大変危険なので、必ず避けるようにしましょう。

